

○第三部最優秀賞 青森県教育委員会教育長賞
一粒への感謝

大館中学校（八戸市）

二年 舘坂 咲希（たてさか・さき）

「今日は、お米じゃないのが食べたい。」

と私は、言ってしまった事がある。私はいつも階上に住んでいる祖母と祖父がつくってくれているおいしいお米を食べている。でもこの時は、祖母と祖父の気持ちを考えずに言ってしまった。お米を育てる事は大変だと知っている。お米が食べられる事は、祖母と祖父が一生懸命つくってくれているからで決して当たり前な事ではない。なぜ、こんな事を言ってしまったのだろうか。考えている時に、お米作りの手伝いに行った事を思い出した。

小学六年生の頃のある週末に収穫したお米を干す作業を手伝ってくれないかと祖母から、連絡がきた。この時の私は、上手くできるか不安があったけれど、手伝いに行った。手伝う作業は収穫されたお米を束ねてビニールハウスの中にある鉄柱に掛ける、はせがけという作業だ。実際にやってみると、数十分で汗がたくさん出るほどになった。お米の一束は思っていた以上に重く、鉄柱にかけるために持ち上げる作業はとても大変だった。最初は、上手くできなかったけれど、手伝っていくうちにスムーズに行えるようになった。休憩している時に飲んだ麦茶は今まで飲んだお茶の中で一番おいしいと感じられた。私が休憩している時も、祖母は手を休めず一生懸命作業を続けていた。

私は、鉄柱に掛ける作業を終え、祖母の家へと戻った。私の後に続いて何人かが戻ってきたが、祖母は戻ってこなかった。私はもうくたくたになっていて、足もパンパンだった。しかし、祖母は私が戻ってからだいたい一時間後に家へと戻ってきた。祖母に冷たいお茶を出しに行った。額には、たくさん汗をかいていた。私は祖母に聞いてみた。

「こんな大変な作業をどうして毎年しているの、つらくないの。」
と。すると祖母は答えた。

「毎年やるのは、とても大変だよ。でも、作ったお米を食べている時に笑顔を見ると辛さなんて忘れて、来年も頑張ろうって思えるんだよ。」

と。その後、祖母はまた作業に戻った。それに私も付いていき手伝った。作業している祖母からは、大変さが見えず愛情が伝わってきた。夜は、皆で食事をした。昨年穫れたお米を食べた。たくさん動いたからかとてもおいしく感じられた。ここでしか食べられない様なほど甘くて特別だと思った。皆お米を口に運ぶと笑顔になっていた。その笑顔を見て祖母が言った。

「笑顔を見たら疲れが吹き飛んだでしょ、来年は田植えから手伝いに来てちょうだいね。」

私は、来年も手伝えたいと思った。たったの米粒一粒でみんな笑顔にしたお米は魔法のようだ。

なぜ、あんな事を言ってしまったのか、考えた。きっと、お米を作る大変さを知ったつもりでいたからだ。これは、忘れてはいけなさと改めて思った。また最近、パンを食べる人が増えお米が余っていると耳にする。私はそれ聞いて悲しくなる。私の祖母と同じ思いで作っている人の気持ちを裏切っているようだからだ。お米を食べない人たちにも魔法のお米を食べてもらい、笑顔になってもらいたい。また、余らないようになってほしい。

私は今回、お米から祖母からたくさんの事を学ぶ事が出来た。たったの一粒でもみんなを笑顔にできる魔法を食べられる事は当たり前ではない。たくさんの人々のお陰があつてだ。食べるという事ができるということ自体が幸せな事だと気づかせてくれた。だから、食べる時には米一粒一粒に、作ってくれた人に感謝して食べていきたいと思う。世界中の人々が笑顔になれる魔法を食べて、笑顔になり、余るといふ悲しい事がなくなつてほしい。